

2023年3月18日

北海道 AALA 学習会のためのレジメ

ウクライナ戦争を通じて戦争と平和を考える とくにウクライナ政府の対応を中心に

報告： 鈴木頌

． 思想転換の5つのステップ

ウクライナ戦争開始 周年を機に、これまでの、私の考えの流れを振り返ってみたいと思います。一つの流れは、言うまでもなくウクライナ戦争そのものの評価の流れです。もう一つは、それが日本と私たちの「戦争と平和をめぐる考え」にどうインパクトを与えているかの分析です。

今まで前者について多く語ってきましたが、後者の問題についてはすっきりと整理できていなかったと思います。とくにウクライナ側の対応についての省察です。この学習会を機に、日本における平和のあり方について、ウクライナ戦争が何を教えてくれたかを考えてみたいと思います。

考え方を整理するために、この1年間を次のように分けて考えてみることにしました。分類の指標は、おもに自分の考え方が大きく変化する変曲点でもあります。

0．戦争開始前の自衛論

- 1．2月24日 武装侵攻開始の反応。ロシア大国主義への怒り
- 2．ウクライナ軍の武装抵抗への共感と違和感
- 3．アメリカの関与が明らかになる。この戦争の複雑さへの理解
- 4．停戦路線の中断と武力対立路線。続けてはいけない戦争の継続。
- 5．完全な膠着状態への移行と、果てしない犠牲。無条件平和の呼びかけ。

以下、これを目次としながら考えてみたいと思います。

.....

0．我が国におけるこれまでの自衛論

この問題は膨大な内容を抱えており、正確な表現はできません。私の個人的な感想になってしまうと思いますが、議論を進めるための踏み台と思って聞いておいてください。

柱は以下の4つです。

- * 自衛権は民族自決権の一部であり、民族固有の権利である。
- * 実際には自衛権が発動される場面はない。自衛権は非戦の思想と結びついてこそ生かされる権利。
- * 他国に防衛を頼む「抑止力切り離し」理論は有害無益。厳密な抑止は存在せず、対応義務は絶対。
- * 非武装中立や専守防衛の矛盾。大事なのは、あれこれのオプションではなく「非戦」という思想

実は、これにはウクライナ体験を踏まえての最近の考え方もふくまれています。おふくみ置きください。

1 . 侵攻開始への初期反応

A) 私たちはすべて「正義派」だった

報道を受けての最初の感想は、「信じられない、ハンガリー・チェコ侵攻の再現か」というものでした。一瞬のうちに日本国民のほとんどが反ロシア派となりました。反応をまとめると次のようになるとと思います。

- * ロシア・真っ黒、ウクライナ真っ白。
- * 対口経済制裁、全面的なウクライナ支援。事実上の軍事支援承認
- * 「国連憲章を守れ」という事実上の強硬路線。

B) 「なぜ？」の問いかけは省略された

* ロシア人芸術家やスポーツ選手の排除が**何の疑問もなく**強行されました。これは戦時中の日本人強制収容と同じ発想です。名歌手アンナ・ネトレプコは各地の歌劇場からパージされるに当たりこう述べました。

「私はこの戦争に反対だ。私はロシア人で祖国を愛している。ウクライナにも多くの友人がいて、彼らの苦境に心を痛めている。この戦争の終結と平和が私の望みである。付け加えるなら、芸術家に祖国への糾弾を強制するのは正しいやり方ではない。政治的分断を超えた和合が私の目的だ」

* 開戦の当初から NATO 諸国のウクライナへの軍事支援が行われている。交戦国の一方に対する軍事支援の可否は、戦争そのものとは別問題である。これについて和仁はこう論じています。

諸国がウクライナに与えている軍事援助について、その交戦国（ウクライナ）が合法的に武力を行使する国である場合には集団的自衛権により正当化されるが、...他方交戦国（ロシア）によって違法な武力行使または武力攻撃とみなされる可能性を排除できない。（<https://drive.google.com/drive/my-drive>）

* 「国連憲章を守れ」と言うのは、「撤退なくして交渉なし」と事実上同義語になります。これは現実を考えると無理な話で、「交渉なくして撤退なし」というのが常識でしょう。

ということで、西側勢力によって論理のすり替えが行われていることに、やがて気づいていくことになります。

2 . ウクライナ軍の武装抵抗への共感と違和感

当初はロシアへの怒りと、ウクライナへの同情がありました。そこへもってきた圧倒的劣勢と見られたウクライナ軍の予想外の健闘があり、それが「ウクライナ頑張り」の声援へと広がっていきました。

- * ウクライナの無条件美化、NATO の “やらせ” 無視。
- * 「本土決戦」という最悪の反応への疑問

現在では、救世主と呼ばれた対戦車ミサイル「ジャベリン」を始め多くの米国製武器が前線配備されていたことが明らかです。それは、「ウクライナ軍は弱小を顧みず果敢に立ち向かった英雄」というイメージとは異なったものでした。

そのことが分かったのはだいぶあとのことですが、それが分からずとも、ウクライナ政府の「本土決戦」の決意は異様なものでした。過ぐる世界大戦において沖縄を失い、満州を失い、原爆の被害にあった日本はなおかつ戦争を継続しようとしします。最後の選択肢となったのが「本土決戦」でした。しかしさまざまな経過の上、最後に和平派が好戦派を押し切って無条件降伏に至ります。ウクライナはまさにその地点をスタートにして戦争をやるうというのです。私からみればそれは「狂気の沙汰」です。敵の砲

弾も味方の砲弾も米国の砲弾も、落ち行く先は皆ウクライナの国土と国民の上です。

なんとか避ける方法はなかったのでしょうか。避ける勇気、正気はなかったのでしょうか。

3 . アメリカの関与が次第に明らかになる。

* この戦争の複雑さへの理解。米国外交主流派がロシアいじめに反対。ネオコンを糾弾。

* 「ミンスク合意」に立ち帰る道、それを妨げるもの。

省略された「なぜ」の問いかけにこだわった人たちの疑いは、その後、他にもない米国外交の主流を占めていた人たちの発言によって、深まっていきます。そして「ミンスク合意」の存在を知って、確信へと変わっていきます。主流派とはジョージ・ケナン、ヘンリー・キッシンジャー、ミアシャイマーなどです。彼らの活躍した時代は冷戦終結の時代に重なります。彼らはソ連・ロシアと欧州平和の構造の維持で一致しました。ところが米国外交がネオコン（保守過激派）の方向にぶれていき、ロシアを追い詰めました。つまり米国がロシアのウクライナ侵攻を招いた真の犯人だとするのが、彼らの共通した見解です。

ミンスク合意の唯一の利点は、「叩き台」として合意されているということに尽きます。合意なんてものは無きに等しい、むしろ“相違点が合意された”というべきものです。

その後、流産に終わりましたが「4月イスタンブール合意」というものも存在します。報道（22年4月4日NHK）によれば

（1）ウクライナの首都キーウ周辺におけるロシア軍の軍事活動の大幅縮小、

（2）ウクライナの「中立化」（NATO非加入）

（3）クリミア半島の主権に関する今後15年間の協議。

というものです。

以上のことから、戦争を速やかに停止に導くことこそが、アメリカの恐怖支配を終わらせる唯一の経路だということが分かります。

米国の本音は、そもそも交渉などさせないということです。そのためには「なんとかの虐殺」やパイプラインの破壊などためらうところがありません。

4 . 停戦路線の中断

思い出してほしい。3月30日には停戦交渉がいったん終了し、ロシアはキエフ周辺の兵力引揚げを通告。このような見通しが語られていた。「ウクライナがロシアの即時撤退まで求めるのか、ロシアによる掌握を認めるのかなど、その取り扱いが焦点だ」(NHK ニュース)

- * 武力対立路線への固執。続けてはいけない戦争。
- * 非西側諸国の離反。西側諸国の二重基準に反感
- * ウクライナ国民支援は、ウクライナ政府支援ではない

4月5日の「ブチャの虐殺」報道こそ戦争の最大の岐路でした。市民が虐殺されたことも問題ですが、それよりはるかに深刻なのは、和平の道がこれで閉ざされたことです。

「虐殺は非人道的だから、そのような勢力との間に妥協はない」というのがウクライナと西側勢力の言い分でした。

押さえて置かなければならないこと、始めてはいけない戦争を始めたのはロシアです。しかし続けてはいけない戦争を続けたのはウクライナ(の側)だということです。

我々第三者にとって、これは重い意味を持ちます。ウクライナの国民の命と暮らしを守り、一刻も早い平和の実現を願うのは変わりありませんが、そのこととウクライナ政府、とくに戦争継続へと突き進みはじめたウクライナ政府に、これ以上寄り添うことはできません。

我々第三者にとって、もう一つ分けて考えなければならぬ問題があります。西欧社会が人権を至上の価値としながら、人権に反する戦争をさらに激化させていることです。さらに途上国にとってはコロナワクチンを独り占めにした先進国の人権意識は不信の極みです。

5 . 膠着状態への移行

4月上旬に和平への願いが打ち砕かれ、戦闘が続いています。この間西側の報道は、ウクライナ軍が各地で反撃に出ている。ロシア軍は消耗し戦線維持が困難になっている。ロシア兵の士気は低下し、各地で住民への残虐行為が続発している。という三本立のキャンペーンを続け、戦闘継続を合理化してきました。

しかし昨年暮れ辺りから、戦況は決してウクライナ有利というものではなく、ひいき目に見ても拮抗状態となっています。すると今度は、「このままでは危険、もっと多くの武器を」と叫び始めました。まさに戦時中から末期にかけての大本営発表を思い起こさせます。最後は「一億玉砕」となるのでしょうか。

現段階での政治状況の要点はこうなります。

- * 果てしない犠牲。さらに武器をつぎ込む西側諸国
- * ウクライナの焦土化と荒廃、それはロシアのせいなのか
- * 和平工作を試みる非西側諸国と、これを敵視する西側諸国

端的に言えば、さまざまな戦争の中でも最悪な経過を取りつつある戦争のひとつと言えます。

6 . ウクライナ戦争の日本にとっての意味

- * 本土決戦の恐ろしさ。あのときもし本土決戦に入っていたら...
- * 非戦を貫くことの大切さ。どんな事があっても戦争は回避するという決意
- * 抑止力、核の傘概念は無間地獄。軍事同盟は平和同盟ではなく危険同盟。

森嶋通夫の有名な「白旗・赤旗」論の一節だ。当時の仮想敵国であるソ連を念頭に置いたものだ。

...いずれにせよ最悪の事態が起これば、残念ながら日本には一億玉砕か一億降伏かの手しかない。玉砕が無意味なら降参ということになるが、降参するのなら軍備はゼロで十分だ。

...不幸にして最悪の事態が起これば、白旗と赤旗をもって、平静にソ連軍を迎えるよりほかない。34年前に米軍を迎えたように、である。

凄まじいリアリズムであるが、反論の言葉を飲み込まざるを得ない、殺気にも似た迫力がある。